

日常で使うことばに着目して考える

—家庭で生まれたことば・家庭方言を通して—

本 田 祐 吾

I 研究の目的と方法

- 1 研究の目的
- 2 研究の方法

II 家庭方言について

- 1 家庭方言を学習で取り上げる意味
- 2 子どもがことばを獲得するということ

III 授業の実際

- 1 学習の目標
- 2 「これって、なに？—家だけで使っていることばをみつけよう—」指導計画
- 3 授業の実際

IV 考察

- 1 子どもたちの感想から考える
- 2 家庭方言を分類する
- 3 おわりに

V 資料

I 研究の目的と方法

1 研究の目的

ことばは、標準語のように全国共通に通じるものだけでなく、方言のようにその地方でだけに通じることばがある。さらに、学校だけで通じることばもあれば、仲間うちだけ、家族の中でだけ通じることばもある。子どもたちは、標準語だけでなく、学校や家庭などさまざまな場面で使われることばを、無意識に使い分けている。この中でも、学校では地方の方言については学習の機会があるが、家庭でしか通じないことばを学習する場面はない。

だが、子どものことばの育ちは、家庭で培われる側面も大きい。ことばは、学校で習い教えるような国内共通言語、すなわち標準語だけでなく、地域の言語、学校の言語、家庭での言語とさまざまある。それらを大切にしていかなないと、ことばの力がやせ細っていくのではないだろうか。学校で教えることばと同様、子どもの生活から広がることばの世界を大切にしていけることが、豊かなことばを育てていくことにつながるのではないかと考える。その中でも、本研究では家庭での言語を学習として取り上げ、日常使うことばについて着目したいと考えた。

ことばの意味生成は、家庭や狭い共同体の中でもしばしば行われている。その中には、一般的になっていることばもある。例えば、電子レンジを「チン」とよんだり、自転車を「チャリ」とか「チャリンコ」、「ママチャリ」などとよんだりするのがそれである。これ以外にも、家庭だけで意味の通じることばがあるが、日常化しているため無意識に使われていることもある。こうした家庭だけで通じることばを「家庭方言」として学習で取り上げ、問いなおしていくことで、自分の言語環境を意識して見つめなおすことにつながり、メタ言語意識を育んでいくのではないかと考えている。

2 研究の方法

家庭方言にかかわる、小学生への調査研究や先行実践は、筆者の管見の限り見当たらない。そこで、以下のように実践と研究を行うことにする。

- 家庭方言の定義を知った上で、子どもたちが家で家庭方言を探す。
- 家庭でみつけた家庭方言を学校で共通の視点でまとめ、伝え合う。
- 各自の家庭方言が、どのような経緯で生まれたか、子どもたちと分類を試みる。
- 子どもたちの家庭方言がどのような由来のものであるか改めて分類し、傾向をみる。
- 子どもたちの学習のふり返りから、この学習の目的が達成できているかを検証する。

II 家庭方言について

1 家庭方言を学習で取り上げる意味

乳幼児期の子どもたちは、主として家庭の中でことばを獲得している。それが就学期になると、幼稚園・保育園や学校でも、ことばを獲得していくようになる。そう考えると、子どものことばの育ちは、学校だけでなく、家庭で培われる側面も大きい。

前章の「1 研究の目的」でも触れたように、私たちが使うことばには、学校で習い教えるような、どこでも通じる言語＝標準語だけでなく、ある地域だけで使う言語＝(いわゆる、地域の)方言がある。他にも、学校だけで通じることばもあれば、仲間うちだけのことば、家族の中だけで通じることばもある。学校だけで使うことばを一つ紹介すると、本校では教室などでよく「ファミリー」ということばを使っているが、どんな意味だと思うだろうか。これは、教室の中での生活班に相当することばとして、日常使われている。このように、学校の中だけで通じることばは、どこの学校でもたくさんあり、これらのことばを西尾実(1975)は「学校方言社会¹⁾」と指摘している。西尾は、これ以外にも三種類の言語社会があると指摘し、学校方言社会の他、家族方言社会と友だち(幼稚園)方言社会があると述べている²⁾。

この中でも、家族方言社会について、小川雅子（1996）はそれを「家庭方言社会³」と呼んで考察し、家庭方言の性質を四つに分類している。

- （1）家庭方言を共通語と錯覚している
- （2）生活習慣からの解釈
- （3）幼児期の言語習慣
- （4）ことばの言い換え

この分類の中から、家庭方言とは何か、どのように生まれるのかが見えてくる。子どもの視点から整理すると、「家族が使っていることばを子どもが受けとめ、理解しようとする」「子どもが自分の周囲にあるものや状況を説明しようとする」「周りの家族が、子どもに分かりやすいことばで伝えようとする」ことばが、そのまま家族の中で定着したものが、家庭方言であるといえる。

これらから分かることは、幼児期の子どもたちが自力でことばを獲得していく過程で、自分の見たことや聞いたことを何とか言語化しようとする事それ自体が、ことばを生み出す試みであるといえるのではないだろうか。周囲の家族もまた、その幼児のことばを何とか解釈し、コミュニケーションをとろうとする中で、共通言語となっていくのである。同時に、周囲の家族が乳幼児とコミュニケーションを何とかとろうとする中で、同じことばを使おうとする試みもまた、幼児の言語習得の助けとなるとともに、共通言語化していくのである。換言すれば、家庭方言は「家族の中で成立したことば」であり、岡本(1982)が指摘する、ことばが成立する条件とも一致してくる。

ことばが成立する条件は、音声（自分及び他人の）が、意味をにない、それによって物や事象を表示することが可能になることであるのはいままでのないが、問題はそれがコミュニケーションの場をとおして機能する点にある。そのためにはまず、音声は相手に自分が目的とする特定の行動や意味をひきおこすための道具として意図的に使用されること、そして、その効果が保証されるためには、その音声の意味が自分だけに通ずるのではなく、自分にとっても、他人にとっても同一の意味をさし示すことが必要である。つまり、ことばが社会的約束の上に成立している記号であるということである。⁴

このように、家庭方言に着目することは、子ども自身が本来もっている、言語習得能力にもう一度気付く場面となり得るのではないか。同時に、ことばが互いの意思疎通のために、絶えず変化し、意味が生成されることを考える場面となり得るのではないかと考える。

2 子どもがことばを獲得するという事

家庭方言は、乳幼児期の子どもたちが周囲とコミュニケーションをする際に生まれるものだと、前節で述べた。ここでは、その乳幼児期に、私たちは生まれてからこれまでどのようにことばを獲得してくるのかについて見ていきたい。

生まれた頃は、ことばを全く話すことができなかったものが、体系的にことばを教わることはなくとも、幼児期には話せるようになってくる。広瀬友紀（2017）は、『ちいさい言語学者の冒険』のまえがきの中で次のように述べている。

私たちは小さいころにいつのまにか、日本語をいとも自然に身につけ、大人になった今は立派に使いこなしています。ですが、自分がいったいどのようにことばを習得してきたのか、今になって振り返っても、その過程を思い出すことは残念ながらほとんどできません。⁵

広瀬はこの著書の中で、自身の子どものエピソードを元に言語学の知見を生かし、子どものことばの獲得の過程をまとめている。また、岡本夏木（1982）も、『子どもとことば』で次のように述べる。

個人差は大きいですが、一般に平均してみると満一歳の誕生日を迎える前後から、ことばらしいものが出はじめ、一歳半から二歳前後にかけて、急激に——ある人の表現をかりると「爆発的に」——おしゃべりははじめる。そして三歳ともなると立派に言語の国の市民権を獲得する...（後略）⁶

子どもがことばを獲得していく過程について、岡本は同じ本の中で「(前略) 外からの刺激としてのことばを、そのまま機械的に写しとっていくのではなく、自分の活動をとおし、選択的に自主的に使いはじめるのである⁷」と述べている。こうしてみると、前述したように子どもたちはことばを体系的に教わるのではなく、周囲の人のことばを自分なりに捉え、自分なりにその法則性を見出して、ことばを獲得しているのだといえるだろう。広瀬も、同様の指摘をしている。

私たち大人が自力で思い出せない、「ことばを身につけた過程」、直接のぞいてみられない「頭の中のことばの知識のすがた」を、子どもの助けを借りて探ってみましょう。子どもたちはそうした知識をまさに試行錯誤しながら積み上げている最中です。大人の言うことを丸覚えするのではなく、ことばの秩序を私たちが思うよりずっと論理的なやり方で見だし、試し、整理していく——子どもたちが「ちいさい言語学者」と呼ばれるゆえんです。⁸

つまり、子どもは論理的なやり方でことばを類推しながら意味を限定させているということである。例えば、ある子どもにとって、最初は四つ足の動物は何でもニャーニャーだったのが、さまざまな情報を整理していくうちに、少しずつニャーニャー＝ネコに限定されていく。この過程の中で、様々な状況や場面でニャーニャーという語を使ったり、その際の周囲の大人の反応を見たりしながら、徐々に意味を絞っていく。このように考えると、子どもは周囲の情報から論理的に類推してことばを理解する力をもっているともいえる。こうした力を子どもたちが持ち続けること、またこの力を生かした授業づくりが、ことばのセンスをみがき、他者とのコミュニケーションの力を育てることにもつながるのではないだろうか。

このことばを獲得する過程の初期は、いわゆる赤ちゃんことばが使われる。前述したように、大人もまた、子どもに対しては大人同士の会話とはちがうことばを用いる。これは、「育児語」とか「ベビートーク」とも呼ばれている。⁹この赤ちゃんことばは、オノマトペであるものも多い。そのため、子どもたちが家庭方言を見つけてきた際も、オノマトペが多いことが予想される。

この赤ちゃんことばにオノマトペが多いことについては、日本語にオノマトペが多いと言われることも関わりがあるようである。この点について、窪菌晴夫(2017)は、オノマトペと赤ちゃんことばは文法的機能に顕著な違いがあるが、音声構造は酷似しており、共通性が高いと指摘している。また、その音声特徴は、大人の言語にも引き継がれており、オノマトペと赤ちゃんことばが、大人の言語の骨格を作っているといっても過言ではないと指摘している。¹⁰

また、赤ちゃんことばとオノマトペについて、今井むつみ(2017)は、赤ちゃんは視覚、聴覚、触覚、嗅覚など異なる種類の感覚のネットワークが混線していることで、視覚と聴覚の刺激の間が対応づけられ、その結果、音と視覚の間に自然に類似性を感じるのではないかと述べている。また、ことばの意味のコアを見つける助けとなり、ことばの仕組みを子どもが発見することに役立つのだと述べている。¹¹

子どもたちが、自分の力で法則性を見出し、ことばを獲得しているのだとすると、家庭方言もまた、子どもたちの中で共通するものと異なるものが出てくるのではないかと推測できる。その際、オノマトペの家庭方言については、その音の感覚から、共感できたり、反対に違和感をもったりすることもあるであろう。オノマトペを切り口に、そうしたことばのズレを感じることもまた、ことばの感覚やコミュニケーションを考える一つのきっかけになるのではないかと考える。

Ⅲ 授業の実際

1 学習の目標

家庭で使っていることばを振り返り、自分の使っていることばについて関心や気づきをもつ

2 「これって、なに？—家だけで使っていることばをみつけよう—」指導計画

(2015年3年生3学期実施)

(1) 導入 … これって、なに？ (1時間)

子どもたちが日常使うことばを振り返り、学校や社会で使うことば以外にも、家庭だけに独特のものや動作を表すことばがあることに気づく。

(2) 展開①… 家の中だけで通じることばを探してみようー家庭での調べ学習ー

(1週間：(3)と平行して行う)

実際に、家庭で自分が使うことばや家族の使うことばに着目して、自分の家だけで使っていることば=家庭方言を探す。

(3) 展開①… これって、なに？ー調べた家庭方言を紹介しようー (2時間)

家庭で見つけた家庭方言を問題にし、聴き手が質問をしながらことばの意味を想像して、何を表しているのかを考える。また、他の家庭の家庭方言の見つけ方や家庭方言自体を参考に、自分の家庭方言調べに役立てる。

(4) 展開②… 自分の家庭方言をまとめよう (2時間)

「(3)家庭方言を紹介しよう」の学習を参考に、自分が調べてきた家庭方言を紙にまとめる。

(5) 展開③… 家庭方言のひみつをさぐる①ー友だちの家庭方言を当ててみようー (1時間)

「(4)自分の家庭方言をまとめよう」で紙にまとめた家庭方言を見て、友だちの家庭方言の意味を当てたりしながら、たくさんの家庭方言にふれる。

(6) 展開③… 家庭方言のひみつをさぐる②ーみんなの家庭方言を仲間分けすると？ー (2時間)

「(5)家庭方言のひみつをさぐる②ーみんなの家庭方言を仲間分けすると？ー」で見た友だちの家庭方言と、自分の家庭方言を合わせて、どのような仲間分けが出来るかを考え、家庭方言がどのようにしてできたのかを考える。

3 授業の実際

(1) 導入 … これって、なに？

子どもに限らず、家庭方言と言われて、それが何かをすぐに理解するのは難しい。そこで、日常のことばの中でもそのものの正しい名称や由来よりも商品名の方が知名度の高いものや、いくつかの言い方があるものなどをみんなで考えることから学習を始めた。

まず、子どもたちにあまり馴染みのなさそうなことば(表1・左)を提示し、それを自分たちが普段何と言っているか(表1・右)を当てるという形で学習を展開した。

宅配便	宅急便
ステーブラー	ホッチキス
キャビンアテンダント	CA
エノコログサ	ネコジャラシ
リュウキュウイモ (カライモ)	サツマイモ

表1 導入で扱ったことば

次に、地方の方言などを取り上げ、その土地だけで使われることばを考えた。取りあげた問題は、実践時に子どもたちがテレビなどで見聞きする可能性があるものにした。ただ、ここでは地方の方言を教えることに主眼を置いているわけではないので、地方の方言があることには触れつつも「一部の人が使うことば」として取り上げた。ここで大切にしたいことは、それぞれのことばを言い当てることではなく、いつも使っていることばが人(地方)によっては、違う表現がされることもあることに気付くことである。そして、それが家でのことば、すなわち家庭方言を考えることにもつながっていくと考えたのである。

日常で使うことばに着目して考える

一部の人が使う	みんなが使う
よかよか	いいよ
どらどら	どれどれ
〇〇へん	〇〇ない／〇〇しない
だんだん	ありがとう

表2 取り上げた地方の方言

これらのことばから、いつも使っていることばも、地方によっては独特のことば＝地方の方言があることを紹介した。すると、自分の祖父母の家が地方にある子どもは、具体的にいくつかのことばを取りあげて説明をしていた。

最後に、自分の家で「自転車」と「テレビのリモコン」を何と呼んでいるかを聞いた。これは、筆者の想定した以上の数のことばが出された。

自転車	チャリンコ、チャリ、ママチャリ、チャリチャリ、二りん車、〇〇号
テレビのリモコン	リモ、リモっち、テレン、チャンネル、ポチポチ、ガチャガチャ、テレリモ、テレカン、リモリモ、リコリコ、テレビ

表3 子どもたちの出した自転車とリモコンの家庭方言

これは本当に使っているのかと思うようなことばも散見されるが、そうしたことばのユーモアや独自性が家庭方言にはあると考えていたので、よいこととした。この学習を元に、これから学習する家庭方言を「家の中だけで通じることば＝家庭方言」と意味づけ、それを家で探してくることを子どもたちに伝えた。中には、すぐに家庭方言を思い出した子もいたようだが、調べ方も含めて最初から制限等をかけず、まずは子どもたちに任せてみることにした。

(2) 展開① … 家の中だけで通じることばを探してみよう－家庭での調べ学習－

(3) 展開① … これって、なに？－調べた家庭方言を紹介しよう－

展開①は「自分の家庭でのことばを見つめなおし、日常でのことばへの関心をもつ」という本学習の目標の中心になるものである。だが、家庭での学習が中心になるため、その支援と評価は難しい。調べ方も、限定しすぎると見つけにくくなる可能性があるため、学習を計画する段階から手立て等を検討してきたが、家庭での調べ学習の時間を多くとることが一番の手立てであると考え、1週間調べる時間をとることにした。その上で、調査期間の途中で、見つけた家庭方言を紹介する学習の時間を設け、家庭方言を見つけるヒントになるように配慮した。

実践を計画している段階では、子どもたちが上手く家庭方言を見つけられるかという不安もあったが、「家で家庭方言を探す」という課題を提示した時に、既に「自分の家に家庭方言がある」と発言している子もいた。実際、三日くらいすると、登校するなり筆者に教えに来る子もいた。授業では、思った以上の子が家庭方言を見つけていたが、その中で何人かの子に一人ずつ家庭方言を発表してもらい、それが何かを当てるといった問題形式とした。授業の際に出された家庭方言は、以下の通りである。

家庭方言	本当の名前
けしけし	消しゴム
がちゃん	玄関のドアチェーン
アルちゃん	アルファード (家の車)
ぶくぶく	炭酸水
カポカポ	竹馬
ボコボコ	(お風呂の) 追い焚き
はごろも	バスタオル

表4 子どもたちの見つけた家庭方言

そして、授業の最後に、まだ家庭方言を見つけられない子へのヒントとして、どのようにして家庭方言を見つけているか、見つけたかについて話し合う時間をとった。そこでは、大きくは二つの方法が出された。一つは「お母さんと一緒に考えて見つけた」で、もう一つは「家の中で話すときに、気をつけて話すようにしたら見つけられた」であった。他にも、「普段よりも話し方を丁寧にするようにしたら見つけた」と言う子や、「家でいつもより黙るようにして、家族が話すのをきいた」と言う子もいた。

この話し合いを経て、すでに家庭方言を見つけた子にも、まだ見つけられない子にも、家庭方言を見つけるヒントになったようであった。

(4) 展開② … 自分の家庭方言をまとめよう

家庭方言を見つけようという課題を出した1週間後、授業で2時間を使い、見つけてきた家庭方言をまとめることにした。どの子も一つ以上の家庭方言を見つけていることができていたので、新たな見つける手立て等を出す必要はなく、全員がまとめる活動に取り組むことができた。

この家庭方言をまとめる学習は、次の「家庭方言のみみつをさぐる①—友だちの家庭方言を当ててみよう—」のための準備である。次時は、楽しみながら取り組めるよう、クイズ形式で互いの家庭方言を見つけ合えるように考えたのだが、楽しんで取り組む先に、自分の家庭方言との共通点や相違点を見つられるよう、単に問題を見てすぐ答えを合わせるようにならないよう、まとめ方を工夫させた。

具体的には、まず家庭方言を見てどのような意味かを推測できるようにし、次に家庭方言のヒントを見ながら最初の推測が合っているかどうかを確かめる。そして、その家庭方言を使った会話やその使用場面を見ながら、推測を確かめたり修正したりし、由来を見ながら答えを見られるようにした。画用紙を四つ折りにし、表5の項目順でまとめ、開くと家庭方言の本来のことばが何かを考えるヒントがみられるようにした。

①見つけた家庭方言を書く	図1
②家庭方言が、本当はどんなことばかを当てるためのヒントを書く	図2
③家庭方言の使い方を会話か使う場面で書く	図3左
④家庭方言の由来を書く (分かる場合)	図3右
⑤答えを書く	図3中

表5 家庭方言のまとめ方



図1 表紙

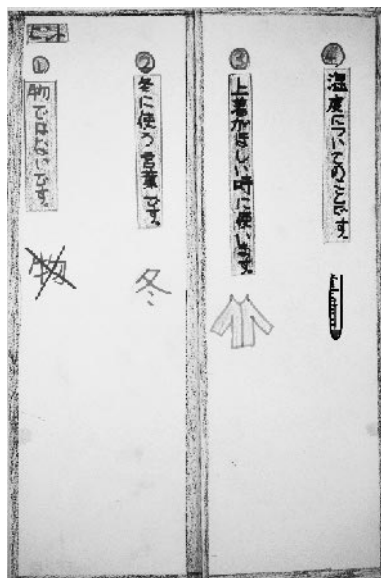


図2 ヒント

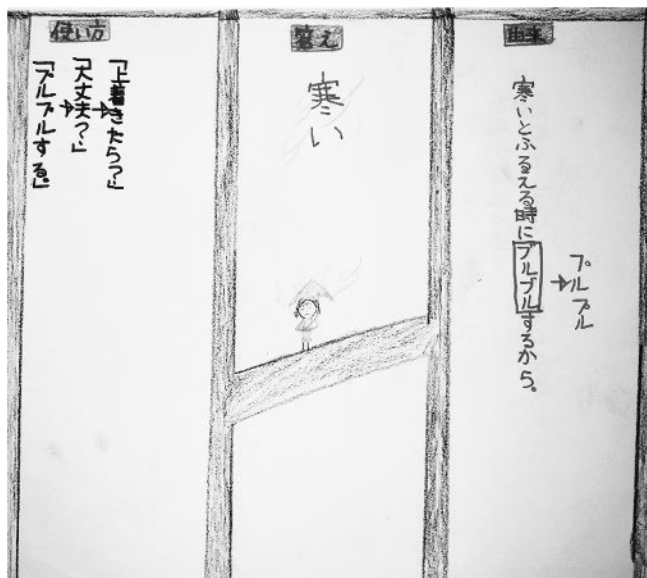


図3 左・使い方 中・答え 右・由来

子どもたちは想定した以上に家庭方言を見つけていたので、中には2時間ではまとめの時間が足りない子もいたが、どうしてもみんなにってもらいたいという動機から、家で仕上げてくる子もいた。また、図1～3の子のように、丁寧に仕上げようとする子が多く、学習を楽しみ、他者を楽しませようという意識が垣間見える作品に仕上がっていた。

(5) 展開③… 家庭方言のひみつをさぐる①—友だちの家庭方言を当ててみよう—

単元の計画時は、見つけた家庭方言が少ない場合は、展開①のように全員で当て合う活動も想定していた。だが、想定よりも家庭方言の数が多くなった上、どの子も発表したいという思いが強かったため、それぞれ自分の机の上に仕上げた家庭方言のカードを置き、自由に回ることにした。その際、すぐに答えを見るのではなく、予想をしながら見ることと、なるべく多くの家庭方言を見て、気づいたことがあったらノートに記録し、次時に話し合うことを伝え、1時間たっぷり時間をとって活動した。

子どもたちは、楽しみながら机間を周り、自分と意味もことばも同じ家庭方言を見つけたり、同じことばなのに違う意味の家庭方言に驚いたり、楽しみながら学習をしていた。子どもたちの家庭方言の一部を表6に紹介したい。

家庭方言	ヒント	使い方	意味
ボコボコ	①食べ物ではない。 ②あったかくする。 ③水にかんけいがある(のみ水ではない)。 ④夜使う事が多い。 ⑤おふろについている。	「ボコボコおすよ!」 「そろそろいいね」 「あつくなるよ」	おいだき
はごろも	①物です。 ②みんなも一日一回は使っていると思います。 ③固くありません。 ④長いです。 ⑤色やがらがついているものもあります。	あせをかいた時や、ぬれた物をふく時につかいます。	タオル
ブルブル	①物ではないです。 ②冬に使う言葉です。	「ブルブルする」 「大丈夫? 上着着たら?」	寒い

プルプル	①おどります。 ②丸いです。 ③きいろとちやいろです。 ④お皿にのせることもできます。	「プルプル食べたい」	プリン
ちゃちゃ	①体がすっぽり入る。 ②自分はふつう二回使う（一日）。 ③小さい子に使う。 ④夜と朝に自分は使う。	「ちゃちゃ入る」 「うん」	ふる
ぼちゃ ぼちゃ	①みんな入った事があります。 ②あたたかいです。 ③おんせんににっています。 ④とてもきもちいいです。	「ぼちゃぼちゃ入ってくるね」 「はやく出てよ～」	おふろ
セロ	①学校にも、家にもあるはずです。 ②いろいろな色があり、とうめいが多いです。 ③はるためにあります。	「セロちょっと持ってきて」 「いいよ。でも少ししかないよ」	セロハン テープ
ごち	①食べ物です。 ②花の色は白色です。 ③赤色です。 ④たぶん、ほとんどの人が好きです。	「ごちがりに行こう！」	いちご

表6 子どもたちの作った家庭方言カード（抜粋）

（6）展開③… 家庭方言のひみつをさぐる②ーみんなの家庭方言を仲間分けすると？ー

前時に家庭方言を見合った際には、すでに子どもたちには気づきがあったようで、この学習の時間もすぐにいくつかの意見が出され、最後は5つの意見にまとまった（表7）。

ことばが省略されたもの	セロ（＝セロハンテープ） かと（＝かりんとう） など
オノマトペ	ボコボコ（＝追い焚き） ぶくぶく（＝炭酸水） など
赤ちゃんことば	ちゃちゃ（＝おふろ） マーメン（ラーメン） など
外来語（外国のことば）	グランマ（＝おばあちゃん） マイペンライ（＝ドンマイ） など
方言（地方のことば）	ラーフル（＝黒板消し） なおす（＝かたづける） など

表7 子どもたちの出した意見

この中でも、ことばの省略・オノマトペ・赤ちゃんことばはかなり多く、ほとんどの子が気づいていた。外来語と方言は、家庭方言の数としては少なかったのだが、いくつかあったものが印象的だったようであった。

これらの気づきは、子どもたちが自分自身の家庭方言を見つけている際にも既に気付いていたようで、展開②の自分の家庭方言をまとめている時にも筆者に伝えに来る子がいた。更に、前時の友だちの家庭方言を見たときにも、その気づきを伝えに来る子がいて、子どもたちなりにただ問題を解くのではなく、共通点や違いを見出すことも意識して活動しているようであった。

そして、最後に学習のふり返しとして、ノートに感想を書くこととした。その感想からも、家庭方言を見つけ、考えることが楽しかったということが読み取れるとともに、日常のことばをふり返し、ことばを意識しようという様子も見られた。以下に、いくつかの感想を紹介する（表8）。

C1(男)	みんないっぱい家庭方言があるんだなと思いました。みんな答えの言葉をしょうりやくしたりしていました。Eさんの「ガチャン」は、音で表していました。ぼくの「ピロン」「ポー」も同じようなことでした。Oさんの「ちゃまこ」は、ちょっと意味がわかりませんでした。とても楽しかったです。みんなの家庭方言は、「赤ちゃん言葉」や音やしぐさ、省略などからきているということがわかりました。たとえば、ぼくの「ポー」は、音です。いろいろたしかめるのもよいと思いました。
C2(女)	私はさい初、「これってなに」という題名を見て、先生が『この形の物は何でしょう?』と聞くのかと思ってしまいました。でも、やっていくうちに「方言」という言葉がでてきたので、言葉で「これはどういう意味でしょう?」と聞くんだなということがわかりました。さい後、家庭方言をやりました。大へんだったことは、よく聞いていても、家庭方言が見つからなかったことです。「カポカポ」もっていい??と聞いて、はっとしました。知らない間に家庭方言を使っていたので、うれしかったです。これってなに?は、さい後から2・3番目で、あと1・2こで国語がおわるのは少し悲しいけど、4年生になってもおぼえておきたいです。
C3(女)	もともとは、家庭方言が見つからなかったけれど、新しく見つかりました。「ボコボコ」です。答えは「おいだき」です。音が「ボコッポコボコ」みたいなのであわが出てくるからです。いつも使っているので分かりませんでした。この学習は、クイズのような楽しい学習でした。公開研究会の時もおもしろかったです。今日は「こんな言葉を使ってる!!」とか、いろいろな事が分かりました。しあげ方がとてもじょうずな人がいたり、おもしろい方言だったり、その人の気持ちがつたわってくる物だったのでいい学習だと思います。
C4(男)	これってなに(家庭方言)の授業をさいしょにやったとき、楽しい、おもしろいと思いました。そして、家でさがして見たけど、さいしょの方は1つも見つからなかったけど、アドバイスをもらって2つ見つかって、ほかにないかさがしたけど、1つありませんでした。赤ちゃんのときの言葉もありませんでした。そしてみんなの家庭方言を聞いていたらおもしろい家庭方言がいっぱいありました。その中にはいた物もありました。同じ物もありました。たとえば、リモコンをテレビのリモコン、ドアチェーンをガチャンとは、ノートには書いていないけど、まだ家庭方言があるので、いつかまた時間があるときにまたしらべようと思います。

表8 学習後の感想

IV 考察

1 子どもたちの感想から考える

学習終了の一週間後、改めて子どもたちに学習について、三つの項目のアンケートを実施した。

①家だけでしか使わないことばは、見つけるのはかんたんでしたか?

また、どうやって見つけましたか?

②友だちの「方言」をきいて、思ったことや考えたことをありますか?

③学習の感想(ここが面白い!もっとうごきたい!ここがいや!など)を書きましょう。

ここでは、①の家庭方言を見つけていることが簡単だったかについて検討したい。これについては、難しいという子が多いと予想していたが、難しいと簡単はほぼ半々に分かれた。

見つけるのが難しいという子たちは、「先生が言ったように、自然に使いすぎていて、難しかった」「使いすぎていて、最初は分からなかった」のような意見が多く見られた。他にも、難しい理由として、「私がふつうにつかっている言葉がみんなは使っていないとは、分からないからです。」と考える子どももいた。また、学習での友だちのアドバイスを元に、丁寧に話すように心がけたり、自分がしゃべることばを意識して話したら見つかったという感想も見られた。

見つけるのが簡単であった子たちは、「メモをとる」や「外と家の言葉をくらべる」などと書いており、見つけ方にいち早く気付いている様子であった。他にも、「家庭方言にすぐ気付いた」など、直感的に気付けた子もいたようであった。

見つけるのが難しかったか、簡単であったかにかかわらず、子どもたちの感想から、本学習を通して日常で当たり前のように使っていることばへの気付きになっていたことは、言えるのではないだろうか。

ここまでの見つけるのが簡単であったかの中でも、子どもたちが少し触れているが、どのようにして家庭方言を見つけたのか、子どものことばを表9にまとめてみた。

C1(男)	よく考えたり、いつもより自分が言っていることや家族が言っている言葉をていねいに聞くこと。
C5(女)	いつもどおりに言葉をいって見つけた。
C6(男)	自分で考える。いつもとちがう言葉を言う。
C7(男)	ていねいな言葉でさがしました。
C8(男)	せいしきなことばで1日話したら、見つかった。
C9(女)	ていねいな言葉は使わなかったけど、使っている言葉を家庭方言かな?と少し考えて見つけた。
C10(男)	しゃべりをメモした。
C11(女)	外と家の言葉をくらべる。
C12(男)	あまりしゃべらない。もしくはたくさんしゃべる。
C13(女)	お母さんやお父さんの言っていることから見つけたり、回りを見てどれが家庭方言かを見つけました。
C14(女)	お母さんなどに聞いたり、ていねいな言葉を使ってみたりしました。
C15(男)	いろいろ見回して見つけた。
C16(女)	お母さんにさりげなく聞いてみた。

表9 子どもたちの家庭方言の見つけ方

見つけ方をみると、お母さんに助けてもらった子もいるが、家庭方言を見つげるために、家での話し方を意識したり、家族の話すことばや自身のことばに注意したりするなど、家庭での日常のことばを意識しようとしていることが読み取れる。この感想からも、ことばへの意識の高まりが分かり、家庭方言を切り口にことばへの意識を高めることができると言えるのではないだろうか。

③の感想では、多くの子どもが「また取り組んでみたい」「これからも家でことばを探してみたい」などと書いており、家庭方言は子どもにとって、ことばへの興味を引き出すには良い学習材であったと言える。また、「友だちのことばを当てるのがおもしろかった」「友だちの家庭方言がおもしろかった」と書く子どもも多く、学習の手立てとしても3年生にはちょうど良かったと言えるのではないかと考える。

反面、多くの子がお母さんを頼るなど、それぞれの家庭で見つけることの難しさもあった。これ自体を、家族みんなでことばを意識するきっかけとして評価することもできるが、見つけ方をどう提示していくかも、検討の余地があると考えられる。

2 家庭方言を分類する

子どもたちと授業で家庭方言の分類を試みたが、その分類は単元を計画した当初に想定したものとほぼ同一であった。ここで改めて、子どもたちの作った家庭方言カードの作品をもう一度見直し、ことばと意味、由来から、再度分類を試みた。

その結果、子どもたちが気付いた、ことばの省略・オノマトペ・赤ちゃんことば・外来語・方言だけでは分類しきれないものもあり、下記の七つに再分類した。なお、分類した家庭方言の一覧については、「V 資料」に記したので、参照いただきたい。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> (1) 動作などの音を由来とした家庭方言 (オノマトペ) (2) 赤ちゃんもしくは小さい頃の言葉を由来とした家庭方言 (3) 家族が元々使っていた家庭方言 (4) 外来語もしくは地方の方言が由来の家庭方言 (5) 言葉を省略したことが由来の家庭方言 (6) 見た様子を由来とした家庭方言 (7) その他の家庭方言 (意識的にことばを生み出したと思われる等) |
|--|

表10 家庭方言の分類表

日常で使うことばに着目して考える

この家庭方言について子どもたちが調べた結果、由来についてはよく分からないものもあり、分類が非常に難しいものもあった。解釈によっては、分類が変わるものもあるのではないかと思えるし、「(7) その他の家庭方言」は、どう分類するかが難しいものであった。改めて、ことばの多様性を感じ、ことばは生きているものなのだとすることを考えさせられた。

また、細かく分類を試みはしたが、基本的には、地方の方言も含め、その家庭で元々使われていたことばと、赤ちゃんや幼児とコミュニケーションをとる際のベビートークや言い間違いに由来するものに大別できるのではないかと考える。家庭で元々つかわれていたものも、お父さんやお母さんが幼少時の赤ちゃんことばであった可能性もあるのではないだろうか。このように考えると、各家庭のことばについて、家族とともに考え直す良い機会になった学習といえるのではないだろうか。

また、家庭方言を、幼児期の記憶も残っている3年生で考えることは、ことばを獲得してきた感覚やことばの奥深さ、面白さを感じるきっかけになると考える。

3 おわりに

ここまでで一、簡単にしか触れられなかった「由来」について考えてみたい。

「Ⅲ 授業の実際」の「表6 子どもたちの作った家庭方言カード(抜粋)」の二つ目に、「はごろも」があるが、その由来について紹介したい。

昔、まだお姉さんと私が小さかったころ、おり姫さまとひこぼしさまの昔話を見て、おり姫の後ろにあるころもがとてもきれいだったので、体を洗う用のタオルをはごろもとよんでいました。

ここまではっきりと由来が書ける家庭方言は、比較的年齢が上がってから使うようになったことばであるか、強い記憶のあることばであると推測できる。それを裏付けるように、「もともとおばあちゃんの頃から家で使われていた」ことば、「赤ちゃんの頃上手く言えなかった」ことばが、そのまま家族で使うことばになったと書かれているものもあった。この由来まで、家で辿りやすくする手立てについては、今後検討していきたい。

また、もう一つ考えさせられることがあった。こちらについては、授業を行う前からある程度推測していたことなのだが、やはり推測通りであったことでもある。両親が外国籍の子どもの場合、換言すると、両親が日本語を母語としていない場合は、家庭方言がほとんどなく、家と外の違いのないことばが使われているようであった。日本語が母語である場合の方が、子どもに対して育児語やベビートークを駆使し、子どものことばを受けとめようとする分、家庭方言が生まれやすいのではないか。また、日本語を母語としていない場合は、正しい日本語を使おうと意識して生活しているため、家庭方言が生まれにくいとも推測できる。こうした点から考えると、家庭方言はことばを柔軟にとらえ、使おうとする中で生まれるものではないかといえる。これについても、今後検証していきたいと考えている。

V 資料

1 動作などの音を由来とした家庭方言（オノマトペ）

家庭方言	意味	家庭方言	意味
ガラガラ	(スーパーなどの) カート	ピオピオ	ひよこ
ぶくぶく	たんさん水	カンカン	ハイヒール
チン	電子レンジ	コロコロ	粘着シート
シュッシュ	きりふき	ウイーン	あわだてき
シュッシュ	しょうどくスプレー	ピッ	パスモ
ピンポン	インターホン	ふきふき	ほこりとり
ピーンポーン	インターホン	ふわふわ	ドライシート (ほこりとり)
カッチンして	テレビをつけること	ふわふわ	毛布
ピコピコ	リモコン	カポカポ	竹馬
ごろん	休憩	ブーブー	くるま
モワモワ	上着	ピピピ	けいび会社のぼうはんシステム作動の音
プルプル	寒い	ほくほく	さつまいも
プルプル	プリン	ポリポリ	ビスケット
ガチャン	ドアチェーン	シャーシャー	スクーター
ガッチャン	シートベルト	ガウガウ	お父さん
ポー	ドライヤー	ピリッ	電話
ボコボコ	(おふろの) おいだき	りん!	カエルのすず
ぽちゃぽちゃ	おふろ	グー	ねる
かんかん	はこのかん	ハッポー	ハト
ガチャガチャ	おもちゃのブロック		

2 赤ちゃんもしくは小さい頃の言葉を由来とした家庭方言

家庭方言	意味	家庭方言	意味
マーメン	ラーメン	アンモ	ミルク
トウモロコシ	トウモロコシ	ちゃちゃ	おふろ
ナーエク	なりたエクスプレス	おぶ	ぬるまゆ
ガタガタ	ダンボール	デデド	おなじ
コンミッチャーチャ	コンクリートミキサー車	はごろも	タオル
ごち	いちご (がり)	ふんー	はなをかむ
ブーブー	おもちゃの車	モチモチ	クッション
ねえね	お姉ちゃん	ベンベン	パン
かか	お母さん	ガラガラペッ	手あらいうがい
かいかいして	背中をかくこと	すっすー	おやすみ
ちゅるちゅるめんめん	年こしそば	アンマンマン	アンパンマン
ジャー	口に入れたのにもどしてしまう事	ぼうぼう	ぼうし
あんよ	あし		

日常で使うことばに着目して考える

3 家族が元々使っていた家庭方言

家庭方言	意味	家庭方言	意味
ちゃちゃ	ふる	パイパイ	パンケーキ
チューチュー	ジュース	ガラガラペツ	うがい
もふもふ	フリースブランケット	ガバ	食卓の納豆を最後に食べる*1
なにうるうる?	なにしているの?	かんます	かきまわす, まぜる
くすくす	くすり	歯を洗う	歯をみがくこと

*1 子どもが実際に書いたのは以下の通り

「うちでは, なっとうは大きなお皿にみんなの分を入れて自分の分になっとうを自分のご飯にのせます。のこりのなっとうが少なくなると自分のご飯になっとうをのせるのではなくなっとうがはいっている大きなお皿の方にごはんを入れてたべることをガバするというのです。」

4 外来語もしくは地方の方言が由来の家庭方言

家庭方言	意味	家庭方言	意味
グランマ	おばあちゃん	ブス	バス
グランパ	おじいちゃん	ラーフル	黒板消し
ホームワーク	しゅくだい	なおす	かたづける
マイペンライ	ドンマイ	手ぼっけ	不器用

5 言葉を省略したことが由来の家庭方言

家庭方言	意味	家庭方言	意味
トマスー	トマトスープ	ペーパー	トイレトペーパー
かど	かりんとう	ゴッキー	ゴキブリ
ごっは	ごはん	32ね	32分にのるね
はん	ごはん	ごはん	5時半
ルイボス	ルイボスティー	ハニカ	ハーモニカ
チーカマ	チーズかまぼこ	そろしゅく	そろばんの宿題
マヨちゃん	マヨネーズ	べん	べんきょう
トラカー	トランプ	ドナルド	マクドナルド
セロ	セロハンテープ	Q	世界の果てまでイッテQ
サバ	サバイバル (本)	イッペンキュウ	世界の果てまでイッテQ
れいこ	れいぞうこ	金, ロード	金曜ロードショー
ケッシィ	けしごむ	u s	U S J
オムぶわ	オムツぶわぶわ		

6 見た様子を由来とした家庭方言

家庭方言	意味	家庭方言	意味
まるやさい	たまねぎ	エスのやつ	フック
ワンワン	けしかすをすいとるそうじき	ネジネジパン	ツイストドーナツ

7 その他の家庭方言（意識的にことばを生み出したと思われる等）

家庭方言	意味	家庭方言	意味
だめて！	だめ+やめて	神	たらこパスタ
ポツイン	ガラケー、けいたい*2	オールマイティ	ドラえもののポケット
はっぱちゃん	パキラ	えんとつ	サンタクロース
バシボ	サッカー	ケッタマシン	じてん車
ブーちゃん	金曜メニュー（夕食）	おはは	歯のきょうせいそうち
どけい	時計がこわれていること	おじさん	私が出たから出るじかん
らいさま	かみなり	ダダ	お父さん
ちやうちやうけん	ちがうよ	ヴェルちゃん	ヴェルファイア（車）
ただんこ	ただいま	おふろあがりのあれ	いちご
くるりんこ	カーテンをしめる事	たからばこ	きんこ
ガム食べてる？	食事中にくちゃくちやする	スッポン	スマホ
自ぜんの宝	虫	りおたん	りょうかいしました
仕事	学校	おしっこボタン	ぼうこう
犬ごえ手ごえ口ごえ	犬のくるみ、または犬	うんちよすくん	うんち
おっちょこちよい	チーズ春巻き	うえ	二階
たまコパン	フレンチトースト	ほろほろ	そばろ（どん）

*2 子どもが実際に書いたのは以下の通り

「ガラケーはボタンをおすとポチで、スマートフォンをタッチするとポチで、ポツインのインはインターネットのインで、ポツインとケータイをよぶ事になった。」

【引用文献】

- 1 西尾実(1975)『西尾実国語教育全集 第七巻』教育出版, p. 326
- 2 同上, p. 326
- 3 小川雅子(1996)『内在価値を感じさせる 国語教育の根幹』溪水社, pp. 143-151
四つの分類の事例を簡単に紹介する。(1)の事例の一つは、「ある学生家庭では、母親が夕飯の買い物に行く時、『エサを買ってくる』と言っていた」そうで、母親の使っていたことばの影響が見受けられる。(2)の事例は、「子どもは、『洗濯する』と言う言葉を、『洗濯機に入れること』と理解していた」そうで、大人の発した言葉と行動を見て言語認識を成立させている。(3)の事例の一つは、「おしぼりを『てんでん』、靴下を『たんたん』と言った幼児の頃の習慣が、今も続いている」ように、幼児期に使用した言語が家族の中で習慣として残っているものである。(4)の事例では、「目覚まし時計を『呼び鈴』、フォークを『チクリ』、テレビのリモコンを『カチャカチャ』『ポチポチ』『チャンネル替え』『テレビ電卓』『ピッピッ』『ビコビコ』『パチ子』など、さまざまな言いかえがあります」と紹介し、この他にも多くの事例が紹介され、家族の中だけの共通言語の存在が指摘されている。
- 4 岡本夏木(1982)『子どもとことば』p. 49
- 5 広瀬友紀(2017)『ちいさい言語学者の冒険 -子どもに学ぶことばの秘密』岩波書店, p. iii
- 6 岡本夏木(1982)『子どもとことば』岩波書店, p. 2
- 7 同上, p. 5
- 8 広瀬, 前掲書, p. iv
- 9 岡本, 前掲書, p. 156
- 10 窪菌晴夫(2017)「どうして赤ちゃん言葉とオノマトペは似ているの?」, 窪菌春夫編『オノマトペの謎-ピカチュウからモフモフまで』岩波書店, pp. 121-142
- 11 今井むつみ(2017)「オノマトペはことばの発達に役にたつの?」, 同上書, pp. 103-119

【参考文献】

- 岡本夏木(1982)『子どもとことば』岩波書店
 岡本夏木(1985)『ことばと発達』岩波書店
 田近洵一(1996)『国語教育の再生と創造 -21世紀へ発信する17の提言-』教育出版
 小川雅子(1996)『内在価値を感じさせる 国語教育の根幹』溪水社

日常で使うことばに着目して考える

- 小川雅子(2004)『生きる力を左右する 子どもたちの言語環境』溪水社
西尾実(1975)『西尾実国語教育全集 第七巻』教育出版
ウィリアム・オグレイディ／内田聖二監訳(2008)『子どもとことばの出会いー言語獲得入門』研究社
木部暢子, 竹田晃子, 田中ゆかり, 日高水穂, 三井はるみ(2013)『方言学入門』三省堂
菅井三実(2015)『人はことばをどう学ぶかー国語教師のための言語科学入門』くろしお出版
井上史雄・木部暢子編著(2016)『はじめて学ぶ方言学 ーことばの多様性をとらえる28章ー』ミネルヴァ書房
窪菌春夫編(2017)『オノマトペの謎ーピカチュウからモフモフまで』岩波書店
広瀬友紀(2017)『ちいさい言語学者の冒険ー子どもに学ぶことばの秘密』岩波書店
中島誠, 岡本夏木, 村井潤一(1999)『ことばの認知の発達』東京大学出版会
丹野眞智俊編著(2007)『オノマトペ(擬音語・擬態語)をいかす ークオリアの言語心理学』あいり出版
麻生武(1992)『身ぶりからことばへ 赤ちゃんにみる私達の起源』新曜社